

2026年度 共立女子大学 指定校制推薦入学者選抜 試験問題

科目	学部	学科	専攻・コース
小論文	看護学部	看護学科	—
受験番号	氏名		採点

Ⅰ 次の文章は、出版社に勤めていた著者が、ケアに関する何冊もの本の編集に携わった経験に基づいて、自ら執筆した書籍の一部である。文中の「川口さん」とは、著者が編集した本の筆者であり、「川口さん」はALS（注参照）という病気を発症した母親の介護についてまとめている。

次の文章を読み、問一、問二に答えなさい。

「やりたくても、できない」——つまり意図と行為との暴力的切断こそが、ALSという病の残酷さの本態である。だから周囲の者はなんとしても患者の意図を知り、それを実現してあげようとする。そこで五十音が書かれた文字盤の出番となる。

透明な文字盤の反対側から患者の目を透かし見て、両者の視線がかち合った部分が患者がその声で発したい文字である。あるいはこの五十音を「アカサタナハマヤラワ」と横に読み上げ、「ラ」でまばたきをしたら「ラリルレロ」と縦に読んで再度まばたきで文字を確定する。

「アカサ、アイウエ……」「イ」。アカサタナ、タチ……「タ」。……アカサタ……え、どこが痛いのか？」ふたたび文字盤を使った対話が繰り返される。気の遠くなるような作業であるにしても、こうして家族はなんとかALS患者とのコミュニケーションがとれる。

しかしALSの症状が進行してまばたきができなくなれば、文字盤は使えなくなる。でも多くの家族は諦めない。何らかの方法で患者が発する微細なサインを探ろうとする。川口さんも妹さんと母親の三人で、本気でESPカードを使ってテレパシーの練習をしていた。

ESPとは「超感覚的知覚」。丸や四角や十字などの模様が描かれたカードを伏せて、その形を当ててテレパシー能力を高める。ここまでして患者の意図を知りたいのだ。この箇所を原稿で読んだとき、ふいに涙が噴き出した。

やがて、そんなささやかなコミュニケーションさえ成立しなくなるときがやってくる。何をしても患者の意図を知ることができなくなる。

川口さんのお母様にも「その時」がやってきた。みな衝撃を受け、絶望の淵に沈む。この時点でコミュニケーション自体を諦めざるを得ない。しかし、ここでも絶望から救ってくれたのは身体である。言語の代わりに、すでにそこにあって盛んに信号を送っていた身体を発見したのだ。

（中略）

言葉は発せなくても、生きている限り身体は汗をかく。青くなったり、鼓動が早まったりする。そんな身体の自律運動を「勝手にこちら側で解釈し、意味づけする日々」がやってきたと川口さんは言う。つまり相手が何かの意志を持って、意図的にこちらに向けて発したメッセージを受け止めるところにコミュニケーションが始まるのではない。身体的なサインをこちらで勝手に解釈し、好きなように意味づける人がいる限り、コミュニケーションは終わらない。

（中略）

これを「介護者のエゴ」と言うのはたやすい。良心的な読者の脳裏にもそんな言葉がかすめたことだろう。しかし、誰よりも強くそう思っていたのが川口さん本人なのだ。（以下略）

【出典】白石正明著、「ケアと編集」、岩波書店、二〇二五年、一七八〜一八〇頁

（注）ALS（筋萎縮性側索硬化症）とは、徐々に全身の筋力が低下して歩くことや話すことも困難になる進行性の難病であり、考える力は保たれるが、やがてまばたきすることも難しくなる。

